

学 術 講 演 と 討 議

Scientific Lecture and Discussion

石 田 洋 一*

Yoichi ISHIDA

留学から帰って学会などの学術講演会に参加するようになって、講演の形式は同じであっても実態がだいぶ違うことに気付かされた。これではいけないと思う点も多い。これらの点について、せめてどういう点を改めるよう努力すべきかということだけでも明らかにしておきたいと思う。

まず第一に、わが国では講演者の発表のしかたが一般に不親切だと思う。聴衆がわかってもらわなくても、かまわないというようなふいん気がある。早口でまくしたてるかと思うと、ツギツギッと声をはりあげてスライドをはやうつしする発表がある。講演者のもち時間が短いのも原因だが、これでは講演とはいえない。発表したという実績かせぎでしかない。

他方、聴講者側の活動もまた、わが国では一般に低調である。討議としては部分的な質問が散発するだけであって、講演の主旨を正面からとりあげて論じて、討議者間に議論がからみあうというようなことがあまり見られないようである。

司会者もまた形式的すぎると思う。ひたすら機械でありたいとでも念じているかのように無表情に同じ文句を繰り返す司会者がある。講演者の実質的介绍をするでもなく、発表内容を整理して討議項目を提案するでもない。これでは、あたかも、司会者の唯一の役割は、質問がゼロだったときにか一言質問して時間をうめることででもあるかのように見える。

はたしてこれでよいものだろうか。いったんこういう習慣ができあがってしまうと、だれもがそれがあたりまえのように思ってしまうがちなもの、わかってもらいにくいのであるが、実際にはもう少しはうまくやれるものなのである。

元来講演という形式は一度に一人しか情報を提供できないのであるから、情報伝達の能率の点で本質的な欠陥をもつ形式なのであって、それにもかかわらずこの方式がひろく行なわれているのは、別に大きな利点があるからにはほかならない。その利点とは、いうまでもない、討議ができるということである。だから討議がないようならなにもこんな会を開いて多数の科学者が一堂に会して時間をつぶす必要はないのである。論文にして配ればよいのである。その方が耳学問よりよっぽど正確であろう。ではどうしたらよいのだろうか。

制度の面からの努力はすでに行なわれつつある。たとえば筆者の所属する日本金属学会では各個研究発表の部門のほかにテーマを選んでシンポジウムを催しているし鉄鋼協会では討論会としてそのテーマの代表的研究者を集めて、通常の発表よりはまとまった内容の講演をさせている。このようにすると一つ一つの講演の時間も長く、同じ問題に従事する研究者が集まるため、討議はたしかに活発になる。しかし反面発表者やテーマが制限される傾向がでてくる。だからといって制限をゆるめると、シンポジウムと銘打った各個研究発表の場となってしまう分類の再編成くらいの意味しかなくなってしまう。もともと研究の発表テーマを制限するのは邪道であって真の解決ではないであろう。第一、せまい分野の専門家が議論するだけなら個々に研究会をひらけばよいので、何もそのために大きな学会など催す必要はないはずである。むしろ学会は専門分野外の研究者が多数開いて、その成果がそれぞれの分野に応用されるというひろがりの面で特色があったはずである。また、これら専門外の研究者がそれぞれの分野の知識を背景として、質問や提案のかたちで講演者になにか新しいアイデアを提供できるというところにも意義があると思われる。とすると、どうやらこのように制度をいじくってもだめで、根本的には、研究者個人個人の自覚と努力を求めることによって習慣を変えてゆくよりしかたがないようである。ではどういふ点に留意すればよいであろうか。

第一には、まず講演者の発表態度を正すべきであろう。「研究発表は内容が正確でさえあればよい。聴衆の大部分は理解できなくても、それは聴衆の勉強不足で自業自得なのであってかまうことではない。どうぞ専門家はわかってくれているのだから。」という態度では困るのである。主役はあくまでも聴衆である。講演者はむしろ聴講者の理解度にあわせる義務があるのであって、もし、聴講者の大部分がわからないようだったらその講演は無価値である。せっかく時間をあけて参加してくれた聴講者に対して失礼にあたるわけである。こういう見地から司会者ももっと積極的に講演者に注意して、わかりやすい講演が行なわれるよう導くべきだと考える。

一方聴講者側には、もっと大きな問題があると思われる。上述したように聴講者側はそれぞれの分野の知識を背景として質問し、なにか新しい提案をする義務があるはずで、自分は新知識を吸収すればこと足りるとして黙

* 東京大学生産技術研究所 第4部

っているのは、せっかくその学問が発展するチャンスがあるのを見逃しているものとして非難さるべきことである。もっともこれは集会のふんい気にも問題があるかもしれない。下手な質問をして自分の無知がバレては恥ずかしいという気持はだれもが持つものであるが、わが国では特にそれを強く感じさせるふんい気があると思う。質問はどうせその場の思いつきであるから、どんな程度のもので許さるべきであろう。

講演者はだれでも質問が致命的な結果になることを怖れるものだが、わが国ではそれを思いやって質問者も質問で困らせるのは失礼にあたるとする態度をとりがちである。日頃追求が生ぬるいものだから、本当に意見が衝突したときは目立ってしまうことになる。討議にこのような感情がまじってはうまくゆかない。筆者はかつてX線解析で高名なフランスの Guinier 教授の講演を聴いた際、彼が米国 Northwestern 大学の Fine 教授にまちがい指摘され演壇上に立往生したのを目撃したことがある。カカシみたい Fine 教授がボソボソと質問を終るか終えぬうちに Guinier 教授は強いフランスなまりの英語で Yow are right! と金切声をあげたのである。これには聴衆の方がびっくりしてしまった。Guinier 教授がタドンのように目を見ひらいて舞台中央に仁王立ちになったさまは、さすがしく感動させるものであったことを覚えている。ふつうの人がこれほど体面にしばられないことはむずかしいが、特にわが国では学問がとかく権威と混同される傾向があるものだから、なおむずかしくなっていると思う。まちがいはまちがいである。体面を考えずフランクな気持で活発な討議ができるような習慣をつくりたいものである。

討議を低調にしているもう一つの原因に、わが国の序列意識があると思う。先輩に反論しないという感覚である。これはたとえば大学院の研究発表会では強くあらわれる。筆者の参加している研究発表会では質問は専ら若手助教授クラス数人の独占であって、聴講する学生の黒々とした群の間にみなぎる沈黙の深さは不気味なほどである。もちろんこれは、わかっていない学生が多いためもあるが、これでは発表者の訓練というだけで、聴講する大学院学生は出欠という強制力によって狩りだされた

サクラである。このくらいならむしろサボらせて時間をほかのことに使わせた方が有効であると言いたくなる。中根千枝さん(タテ社会の人間関係, 講談社現代新書)によれば、これは日本社会の特徴なのだそうで、これほど強い序列意識はチベット社会にしかみられないという。しかしこのチベット社会でも学僧の討論になるとダライラマも王座を降り、敬語も姿を消すのだという。彼らは、インドから仏教教義だけでなく討論の手法も輸入したわけである。わが国は西洋文明を吸収するに際し和魂洋才とか称して吸収対象を知識に限定し、かんじんの学問を生み出してゆく手法の輸入を怠ったようである。なにも社会全体を改革せよとはいわない。チベット社会のように討論の場だけでもよいから自由に発言する習慣をつけなさいといけなさいと思われる。そうしないと、今までのように西洋から学問を輸入していさえすればよかった時代はともかく、これからの時代、自ら創りださねばならない時代に対処してはゆけないと思われる。

この種の訓練には大学院の研究発表会などはどうってつけのはずである。学生時代はまだ教育途中という気持ちはあるし、専門化の程度もしれているから話題は共通である。このような訓練は単に学生に発言の度胸をつけさせるというだけではない、自主的に考える習慣を育てる面でも有効であろう。教える方にとってみても、その学生が将来研究生活に進むことのできる学生であるかどうか判定する目安の一つとしても使えるであろう。質問は、ある程度はわかっていないとできないものだし、自分で考えることに対する自信を持つものだけが質問できるからである。

研究発表会にかぎらず、大学院という教育の場で討議の習慣を育てるのが、この問題の解決策として一見まわり道のようなではあるが、一番有効なものではないかと筆者は考えている。そのためには、大学院は単に研究だけをする場のままであってはならないし、といってノートをとらせることを中心とする授業の場にかえてもいけないのである。自主的に考え議論する習慣をもった真の研究者の養成のために、セミナーや研究発表会の実質をもっと高めるように努力する必要があると痛感させられる。

(1968年3月19日受理)

(p. 25 よりつづく)

- 6) W. Thomson, Math. Phys. Papers I., 232 (1882)
- 7) E. D. Eastman, J. Am. Chem. Soc., 48, 1482(1926), 49, 794 (1927)
- 8) C. Wagner, Ann. Phys., 3, 629(1929), 6, 370(1930)
- 9) The Collected Works of J. Willard Gibbs(Yale University Press, New Haven, Connecticut, 1948), Vol. 1, p. 55.
- 10) S. R. de Groot, P. Mazur, "Nonequilibrium Thermodynamics", North-Holland Publishing Company, p. 217.
- 11) R. P. Rastogi, Trans. Faraday Soc., 61, 854 (1965)
- 12) T. De. Donder, Bull. Acad. Roy. Belg. Cl. Sci., 23,

- 770 (1937), P. Van. Rysselberghe, J. Phys. Chem., 41, 787 (1937)
- 13) F. O. Koenig, J. Am. Chem. Soc., 83, 1029 (1961)
- 14) P. Van. Pysselberghe, Bull. Soc. Chim. Belg., 70, 592 (1961)
- 15) G. J. Hooyman, Proc. Natl. Acad. Sci. U. S., 47, 1169 (1961)
- 16) M. Mane, J. Phys. Chem., 67, 651 (1963)
- 17) P. J. Stoward, Nature, 194, 977 (1962)
- 18) P. Glansdorff, I. Prigogine, Physica, 42, 628 (1956)
- 19) I. Prigogine, "Introduction to Thermodynamics of Irreversible Processes" Interscience Publishers, p. 87.